

# 音楽による想起がもたらすコミュニケーションデザインについての研究

朝田 亘

環境計画学専攻

本論は、音楽による想起がもたらすコミュニケーションが人間関係を更新し、音楽の聴取のあり方までも更新させてゆく一連の動態をいかにしてデザインするか、この主題を解き明かすことを目的とする。その目的達成のために、本論が選んだ研究アプローチは、音楽社会学を元にした記憶・コミュニケーション研究である。研究の対象となる事例では、特定のコミュニティ間で共有される楽曲が、そのコミュニティの成員ひとり一人の記憶を想起させつつもそこに新たな音楽実践が差し挟まれることによって、成員間により多様な対話と想起を促しその楽曲の存在を捉え直してゆくプロセスを精緻に記述した。自らのモデル実践、そして参与観察とインタビューを重ねてきた事例研究を、音楽社会学や音楽による社会心理学をベースに、本論の鍵概念となる「想起」の美学研究、コミュニケーション研究も取り入れながら目的達成に迫った。

本論の背景にあるのは、筆者の実践家としての問題意識である。筆者には、2000年代前半よりライブハウスなどで作曲・演奏活動を行ってきた音楽家としての立場、同時に大阪市内を中心にいくつかの芸術系NPOに関わりながら、様々な地域プロジェクトの企画運営を担ってきた社会活動家としての立場を合わせ持つ、実践志向の特異なキャリアが存在する。その経験から、研究テーマにつながる現場のフィールドワークを進めてきた。しかし、音楽家としては周囲から当然の様に「作曲」、「演奏」をするというイメージを求められ、後述するような既存の音楽（楽曲）を介した想起を主な手法とするアートプロジェクトの企画演出に移行するにつれ、自身の立ち位置を表明することに課題を感じてきた。また、社会活動家としては、地域の「課題解決」を目的としたまちづくりの現場、あるいは福祉や医療分野などにおける「支援」や「治療」を目的とした芸術療法の現場に接近しつつも、あくまでそこで行なわれるコミュニケーションの創造性、あるいは美的な経験の質といった視点を大切にしてきたために、効果という面では「わかりにくい活動」という意見をもらうことも多々あった。したがって、表現活動と社

会活動の狭間で音楽がどのような役割を果せるかを解き明かすことが、本論を進めるに際しての基本的な研究背景として存在する。

第1章「問題」では、前述した研究着手背景を述べながら目的を明らかにし、加えて音楽実践の幅をめぐる議論を、ポピュラー音楽研究や音楽社会心理学の先行研究から読み解き、その問題点の指摘と本論で目指すべき研究の現在地を明らかにした。とりわけ「聴取」という音楽実践に着目しながら、音楽実践の幅を根底から押し広げたミュージッキング、能動的な聴取にまつわる議論、そして昨今のデジタル時代の作曲観の更新など、ポピュラー音楽研究の先行議論を概観した。一方で、これらの先行研究の多くが広い意味での「音楽産業シーン」として語られる現場の考察に偏重している課題を指摘し、より日常生活の中で個々人が音楽をどのように「使用」しているかを追求する研究にも目を向ける様に促した。とりわけ国外の音楽社会心理学の中で取り沙汰される「音楽アイデンティティ」という概念に着目し、「自己のテクノロジー」として人々が音楽を如何様に使いこなすかを紹介しながら、一方で他者とのコミュニケーションにおいて音楽を使用する具体的な事例研究の蓄積が少ない点など、課題も指摘した。

第2章「音楽と想起をめぐる議論」では、記憶にまつわる基礎概念の整理から、まず「想起」という行為の規程のイメージを指し示した上で、音楽実践における「想起」という行為を通して議論されたものを中心に考察した。従来の音楽研究におけるこれらの議論は、とりわけ国内においては「懐かしさ」という感情を扱った高齢者医療の現場や音楽療法の現場研究が多く、クライアントへの治療効果を実証的に研究する内容に偏ってきた。近年では、団塊世代を対象にしたノスタルジア市場など、音楽による「懐かしさ」をテーマにした文化社会学的研究も多く見られるが、いずれにしても音楽から生まれる「想起」という行為そのものを「音楽実践」の重要な要素として位置づける研究は未だ少ない点を指摘した。そこで音楽と「懐かしさ」を巡る議論を一定整

理しつつも、「想起」という行為に単に「過去を再生」とするといった意味以上の批評性を与える視点を、主に国外の造形芸術を取り巻く美学的、文化社会学的議論から導入した。ここでは後続する事例研究を紐解く上で必要となる、——造形芸術のみならず——音楽ならでは新たな「想起の仕方」の発明が、人々の想起によるコミュニケーションにどのような貢献を果しうるかという視点を強調した。

第3章「アートプロジェクトにおける事例研究 —「コピーバンド・プレゼントバンド」「歌と記憶のファクトリー」を通じて—」では、筆者が実践者として企画運営に関わった二つの事例について報告した。この二事例は、ともに小学校における音楽ワークショップであるが、対象者児童に限らず家族や教員や地域住民も交えたアートプロジェクトであり、かつ、これまでの音楽ワークショップでは着目されることのなかった「聴取」という音楽実践に光をあてた。その「聴取」から生まれる「想起」を軸にしたコミュニケーション構造を記しつつ、前章までの先行議論をもとに理論的な考察を行った。これら事例考察における成果は、「能動的聴取」という視点から当該コミュニティに新たな関係性の構築を促してゆく可能性、ならびに、音楽を「使いこなす」という視点を具体的に得ることで、音楽と想起がもたらすコミュニケーションデザインに新たな価値付けを行ったことである。一方で、日常的な音楽実践——その象徴としての音楽と想起による実践——の意義を探ってきた本論においては、アートプロジェクトという枠内でのみ行われる音楽実践の考察に留まっては研究目的を達成できないという課題も同時に指摘した。

第4章「日常実践における事例研究 —歌声スナック「銀杏」における同窓会ならびに校歌斉唱の現場を通じて—」では、前章のモデル実践の課題を引き継ぎ、アートプロジェクトといった「芸術」であることが自明の環境から離れ、より日常的な音楽と想起の実践が展開される現場の考察を行った。その際、着目したのは世間で度々開かれている同窓会およびそこでの校歌斉唱の現場である。ただし、あまたあるそのような現場から、より音楽がもたらす想起の可能性に着目した実践が展開される現場を考察対象として選定した。具体的には、その開催会場である歌声スナック「銀杏」の経営者（ママ）入江公子の実践、すなわち、唱歌や懐メロのコレクター

である入江自らが制作する校歌のオリジナルカラオケ映像の制作とその上映、である。ここでは、現場の詳細な参与観察やインタビューを通じて、同窓会において校歌が参加者にどのような「想起」と「語り」を誘発し、またその過程において入江による実践が差し挟まれることで、どのようなコミュニケーションの変容がもたらされるかを記述した。判明したことは、同窓生たち想起者が校歌を通じてただ過去を懐かしむだけではなく、むしろ現在の時点からの対話と想起を通じて過去の様々な側面を再発見し、他の同窓生たちとの間で紡いできた関係性をさらにアップデートしてゆくといったコミュニケーションが生成されていた点である。そして、この特徴的な想起の仕方において、校歌は、過去と繋がりながらも現在を読み替えていくための触媒として大きな機能を果し、さらに聞き手である入江が同窓生の想起の「メディエーター（媒介者）」となることで、より複雑でダイナミックな想起のコミュニケーションをもたらしていたことも確認できた。

第5章「総合考察 —「想起」という経験、「音楽」という経験に立ち返って—」では、改めて本論のテーマである、音楽による想起がもたらす新たなコミュニケーションデザイン実践を、前述してきた知見を発展させる形で、より様々な社会背景を持つ現場において応用できるよう、さらなる演繹化に努めた。そのための手順として、まず「想起」という経験の質を今一度精緻に分析することを通じて、第2章において述べて来た「想起の仕方」の発明のバリエーションについて、高木光太郎や松島恵介の論考をもとに具体的に整理した。そのうえで第3章と第4章の事例をコミュニケーション（あるいはディスコミュニケーション）という社会的な経験プロセスを重視した分析のもとで再考察し、「想起の聞き手による「表現」を介した想起者の再想起」=「想起経験X」の存在を提示し、その意味を問うた。一方で、「音楽」という経験の質についても整理し、とりわけサイモン・フリスの音楽とアイデンティティを巡る論考をもとに、音楽的体験が社会的な経験プロセスと美的な経験プロセスを互いに実現しあう関係であることを確認した。

以上の分析を踏まえて、第六章「結論 —「音楽」による「想起の場」のデザイン・発明へ—」では、「音楽」と「想起」が各々に持つ可能性を掛け合わせることで生まれるコミュニケーションデザインが、ど

のような社会背景のもとで必要とされるのかに触れ、提言と今後の課題を記した。少子高齢化による地域コミュニティの衰退や、地域固有の祭礼の存亡が取り沙汰される中、そもそも定期的に「記憶を語り合う」という場自体がかつてよりも大幅に減少傾向にある現在において、それでも、同窓会などに代表される想起の場が一定存続していることの意味とは何か。その問いから見えて来るのは、人は誰しも一人で想起したいわけではなく、誰かと共に語り合い、コミュニケーションすることを通じてこそ想起したいという事実ではないか。その上で、本論で述べて来たような、コミュニティの成員のみではない第三者が文化実践を通じた「メディエーター」として参加することで、想起の当事者のみではなし得なかったより多様で豊かな対話と想起イメージの獲得に辿り着いていることを踏まえ、当該コミュニティの外部とも連携し合う新たな「想起の場」のデザイン・発明が、これからの社会に求められていることを提言した。